

11. 富来町の保育所と「子供」

山 田 美 里

- I. はじめに
- II. 富来町の保育所
- III. 富来保育所の歴史
- IV. 富来保育所の現在
- V. 地頭町における「子供」
- VI. おわりに

I. は じ め に

私は、「子ども」、特に小学校に入学するまでの「子ども」に興味を持った。今日、日本では、全国的に少子化が進んでいる。その少子化に関連して、核家族化、過疎化という問題も見えかくれしている。そのような問題も頭におきつつ、富来町全体と、商店街の町である地頭という地域と「子ども」の関わりを見ていこうと思う。

II. 富来町の保育所

富来町内の保育所の歴史などを全体的に見てみる。なお、地頭町の子供が通っている、富来保育所は、全体とは別に、まとめる。

まず、1925年の酒見の託児所規程を見えることにしよう。「第1条 本所は酒見託児所と称し西増穂村字酒見松田村有建物（小学校建物の一部）内に置く。」このように保育所設立時、多くの保育所は、小学校やお寺の中に置かれたり、もと小学校の校舎を利用することが多かった。これから、住民は保育所ができたから利用したというより、保育所に対する住民のニーズにより、つくられたということがわかる。「第3条 本所は本村字酒見、字稲敷の両区居住者の幼児をして3歳より学齢に達し就学するまでの者を収容す。」これは、現在とさほど変化はないと思われるが現在、富来保育所では、生後3ヶ月（中には生後2ヶ月も）からの乳児保育を行っている。これについては、後に少し詳しく述べるが、このように時代が進むにつれて保育所に対するニーズも変化してきている。「第4条 保育の期間春期5月1日から6月30日まで秋期9月20日から10月31日まで。」現在、一般的な保育所は1年を通してやっている。ここでは、農村において農繁期の季節保育所として開設されていたと思われる。「第6条 本所に所長及び専任保母1名、兼任保母3名、助婦1名をおく。」第1条の託児所を、小学校建物の

一部に置くのと、第6条の兼任保母をを置くというのは、やはり第4条にあるように保育の期間が春期と秋期に限定されるからではないかと推測される。「第11条 保育料はこれを徴収せざるも間食に要する実費として幼児1人1口金1銭を徴収するものとす。ただし1家2人以上なるときは、これを半減し極貧者は減免することあるべし。」このように、この託児所では、間食の実費のみ徴収し、保育料をとっていない。

今まで今日の富来町の範囲内に存在した保育所は、富来、風無第1、第2、酒見、西浦、福浦、大福寺、笹波、赤崎、東増穂、熊野、稗造、西海保育所の13保育所である。そのうち風無第1、第2保育所は、1962年に統合され、風無保育所となった。赤崎、西浦、笹波保育所は、1987年統合され西浦保育所となった。1987年には、大福寺、風無保育所が廃所され、西海保育所が設立されたことによって、現在は8保育所となっている。これは、過疎化と少子化の影響であることは、言うまでもない。

ここから、1977年に富来町内にあった、笹波、赤崎、西浦、稗造、福浦港、風無、大福寺、富来、熊野、酒見、東増穂保育所の11保育所のうち富来保育所を除く、10の保育所について少し詳しく述べてみようと思う。

笹波保育所は、西浦小学校を新築した際の古材を利用して建てられた。20数年の歳月を経て、幾度かの補修、改装が行われた。赤崎保育所は、1953年赤崎クラブとして使用されている（1977年現在）建物に保育所が認可され、1970年12月には、新築された。

西浦保育所は、西海地区の中心地、鹿頭地内にある。1950年近くにある常德寺で開設。1956年、農協倉庫が建っている（1977年現在）場所に移転。1969年西浦小中学校にほぼ隣接する場所に建てられた。1987年には、富来町内に11の保育所がある中、西浦地区には、赤崎、西浦、笹波保育所と、3つの保育所が集中していたが、どの保育所も措置児童数の減少、建物の老朽化のため1つに統合され、新庁舎も建てられた。定員は90名。

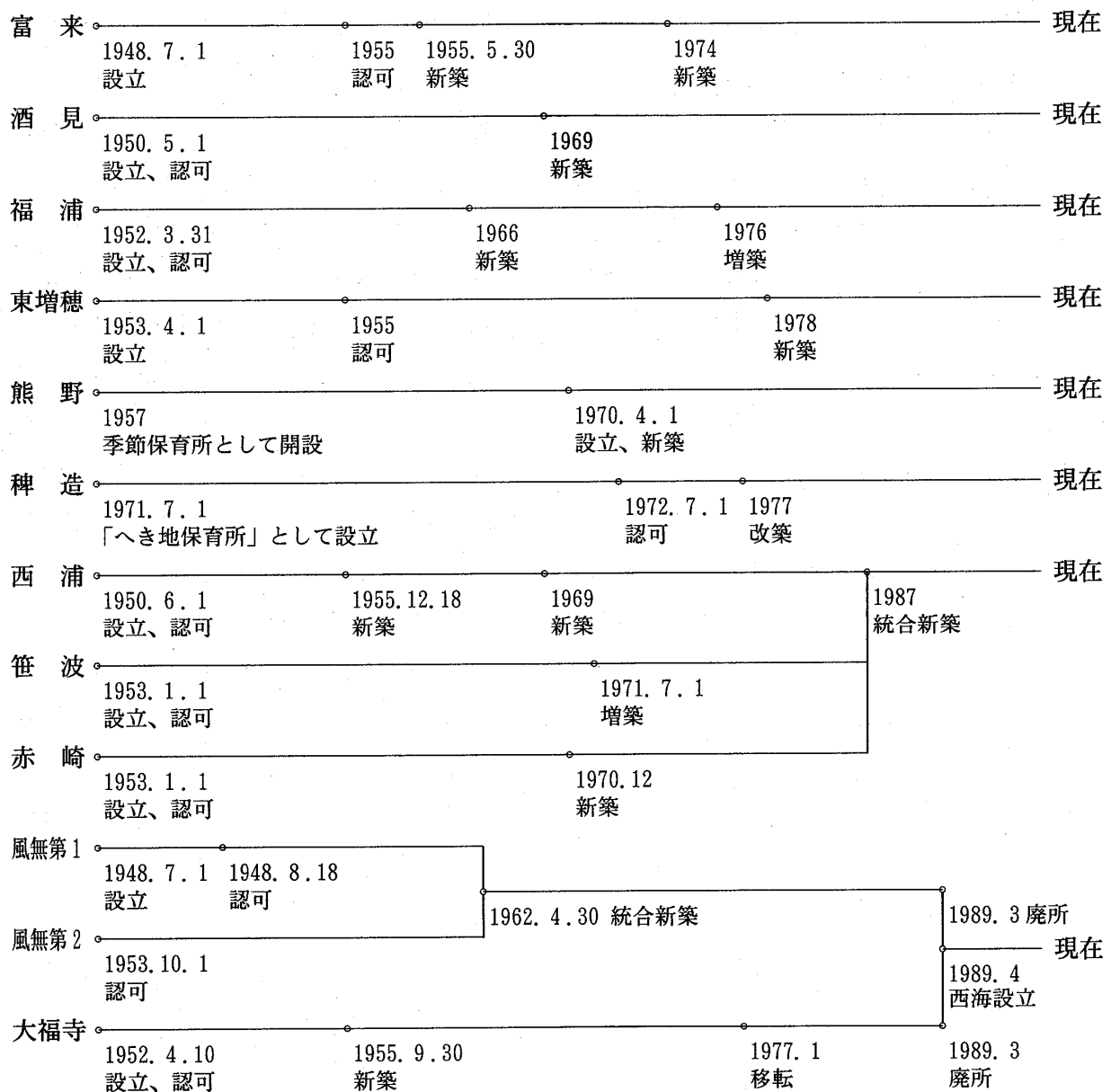
稗造保育所は、正式には1971年稗造地区で初めて設置された。統合で廃校となった旧稗造第1小学校の校舎を改装して利用し、1977年には、未満児も入所可となり、一部屋増の改装工事を終えた。

福浦港保育所は、古くからの歴史をもち、今もその名残をとどめ、漁業基地、観光、船員の町としてなる福浦港地区にある。1966年には、新しく近代的な建物になり、1976年には、屋内施設の充実のため1部屋増やした。

風無保育所は、沿岸漁業の地として栄える西海地区にあった。1948年7月に設置されたが、従来、寺院併用のため完全な保育が出来ないので、1962年4月に風無第1、第2保育所を統合して、建物を新築した。のち、大福寺保育所を1989年4月に統合し、西海保育所となった。

大福寺保育所は、1962年高爪神社境内で開設。1976年末まで同地で保育業務を行っていたが、1977年1月、旧大福寺小学校を改築し、利用するようになった。

図－1 富来町の保育所の変遷



資料：『富来町建設計画基礎調査書』、『富来町史・統資料編』

熊野保育所は、1957年、三明の妙福寺境内で季節保育所として開設し、1970年谷神地内に新築された。

酒見保育所は、1950年、学校の中庭の一角に開設され、1969年酒見社教センターに隣接した所に新築移転した。

東増穂保育所は、増穂砂丘の一角にあり、1955年認可された。1978年3月下旬保育所が完成した。前の保育所の老朽化と、保育児童の増加で手狭になったため、旧東増穂小横に、町内で初めての鉄筋コンクリート平屋建の近代的な保育所になった。

表－１ 富来町の保育所の園児数と職員数（1957、1975、1977）

保育所名	園 児 数					職 員						
	定 員		現 員			1957	1975			1977		
	1957	1975	1957	1975	1977	計	計	保母	調理	計	保母	調理
富 来	160	220	160	219	217	8	16	13	3	18	15	3
酒 見	40	80	40	67	80	3	6	5	1	10	9	1
福 浦	80	80	80	73	73	4	6	5	1	7	6	1
東 増 穂	120	120	120	116	108	6	10	8	2	11	9	2
熊 野		60		44	45		4	3	1	5	4	1
稗 増		60		60	80		4	3	1	7	6	1
西 浦	80	60	80	46	46	4	5	4	1	5	4	1
笹 波	80	80	80	40	39	4	5	4	1	5	4	1
赤 崎	70	60	70	38	44	4	5	4	1	4	3	1
風無第1	80	120	80	87	86	4	7	5	2	9	7	2
風無第2	70		70			4						
大 福 寺	40	40	40	25	23	3	4	3	1	4	3	1
計	820	980	820	815	841	44	72	57	15	85	70	15

資料：『富来町史・続資料編』、『富来町建設計画基礎調査書』、『広報とき』第2巻

入所園児をみると、定員は1957年より1975年の方が大幅に増えているが、現在員は、1957年、1975年、1977年を比べても、それほど変化は見られないようだ。1977年の入所園児の内訳のしてみると、保育所によってもちがうが、全体的に3歳未満児の割合が低いことがわかる。やはり小さいうちは、保育所に出さなくても、だんだん大きくなり、小学校に入学する前には保育所に入れる家庭が、多いのではないかと考えられる。保母などの職員数は、だんだん増えており、保育の充実が推測される。

年長児の数をみると、富来町全体で次のようなことが言える。まず1970年代以降現在まで年長児童が確実に減っている。特に、1986年の166人から1987年の127人へのマイナス39人という急激な減少が目につく。また、1990年までは、3桁だったのが、1992年からは2桁に変わった。1977年の216人から、1987年127人の10年間では、約2分の1に、さらに1997年75人の10年間では、またさらに約60%と目に見えて減少している。1977年の216人と1997年の75人の20年間でみると、なんと約3分の1以下という急激な減少だ。保育所も、それにつれて、新し

表－２ 富来町の保育所の年長児数（1977－1997）

年次 保育所名	1977	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1992	1995	1996	1997
富 来	54	51	47	43	39	26	18	35	18	27	21	20
酒 見	14	14	17	10	8	10	11	8	5	7	4	5
福 浦	23	13	15	9	11	7	8	13	9	4	6	4
東 増 穂	33	25	25	25	15	16	15	25	19	17	16	11
熊 野	16	12	12	11	7	11	14	11	14	6	4	8
稗 増	20	22	16	16	11	7	13	9	4	6	8	6
西 浦	10	7	6	5	4	19	13	9	9	9	8	11
笹 波	9	6	13	8	8							
赤 崎	11	12	8	5	4							
風 無	22	17	20	28	18	23	19					
大 福 寺	4	6	3	6	2	1	3					
西 海								27	19	13	7	10
計	216	185	182	166	127	120	114	137	97	89	74	75

資料：『広報とき』第2巻、第3巻

い保育所がどんどん出来ていくという状態から、ここ10年は、廃所や統合の動きが見られるようになった。過疎化、少子化とは、よく聞かれる言葉だが、こうして具体的な数字を見てみると、あらためて驚いてしまうほどの減少ぶりだ。

Ⅲ. 富来保育所の歴史

地頭町の子供達が通っている、富来保育所を少し詳しくみってみる。まず、富来保育所が設置されていた場所の変遷を、ある女性から聞くことができた。それによると、初めのころは、本光寺にあり、現在の能登信用金庫富来支所の所、現在の福祉会館の所と移り、1974年に今の領家町の場所になったと聞いた。今から30年くらい前、現在の福祉会館の所にあったときは、葉たばこの収納所で保育所が開設され、そこを使うことができない1ヶ月間は、小学校など他の所を借りてしていたことが4、5年間あったそうだ。これらの場所の変遷を資料で調べてみると、次のようなことがわかった。富来保育所は、1948年7月1日創設され、1955年認可された。1955年から、現在の福祉会館の場所で、当初葉たばこ収納所として専売公社が建設したものを

譲り受けて改造し、保育所として使用した。その後、屋外遊技場は道路改良でせばめられ、周囲の空地も少なく、また建物の構造は遊戯室がせまい。さらに、女子従業員を必要とした工場などの進出により急激に要保育児童が増加し四苦八苦していた。そのため、1973年定員増を兼ねて領家地内で改築工事にとりかかり、翌1974年3月には、完成した。現在も、前にはパイロット畑、後には増穂カ浦の海岸という領家地内の高台に位置している（『広報とき』第2巻、250）。

この富来保育所の1977年の様子を見てみる。富来保育所は、町内一のマンモス保育所で、園外活動も活発だ。増穂ヶ浦での砂遊び、歌仙貝拾い、砂丘地ハイキングに、神社めぐり、体力増強のためのマラソン、3歳児以上は、「寒風まさつ」を行っている。情操面では、毎年、春は草花の栽培、秋はクロッカスの成育観察を行っている。このように、富来町にある自然や歴史を存分に活用した園外活動を行うことは、子どもたちが大きくなって町外へ出たとしても、決して消えることなく、故郷を懐しむ良い材料となるのでは、ないだろうか。そして、町を発展させながらも、その景観を守ることは、とても難しいことだとは思いますが、それを守るのが、町に残った人々の役目となるのではないだろうか。また、富来保育所の保護者会では、年3～4回の奉仕作業と、交通安全街頭指導が行われている。

次は、ある女性の話をもとに保育所との関係を見ていく。その家では、息子も孫も2歳から保育所に出したそうだ。その家は、自営業を営んでおり、家族構成も、息子夫婦と暮らす3世代同居であるが、子どもが友だちをほしがる2歳頃から保育所に出したという。このことから、保育所は、親の代わりに、子どもの面倒を見るという役目以外にも、友だちを作り、人間関係という子どもなりの世界で、社会に触れるという大事な役目を持ち、小学校へ入学するまでの予行演習としての機能をもつと考えられていたことがわかった。地頭町では、自営業の家庭が多いこともあって、母乳を飲ませるような小さいうちは、背中に子供をおんぶして仕事をするのが普通だったという。それでも2歳ごろになると保育所に出すというのは、前にも述べたような理由からだという。昔は、町にある工場の中にも、保育所のようなものがあっただろうが、今はなくなってしまったらしい。

父母会などは、昔は「母の会」と言っていたが、今では「父母会」または「保護者会」と言うそうだ。今でも多分にそうではあるが、昔は育児というと、母親というイメージが強いため、「母の会」と言われたのであろうか。最近では、父親が育児に関わることも、とても大事であるし、母親がいない子もいるということも考えて、呼び方が変わったのかもしれない。現在では、とても、まれなことではあるが育児休暇を男の人がとることができるという制度も整えられつつあり、それを実行している人もいると聞く。時代は、変わりつつあるのである。

IV. 富来保育所の現在

現在の富来保育所の通園範囲は、富来地区の領家、地頭、高田、七海、牛下、生神と東増穂地区の給分なのだが、乳児保育は富来町の中で、富来保育所しかやっていないので、上記の他の集落からも来る。この乳児保育は富来保育所で1991年から始められ、富来町内では、富来保育所でしかしていない。生後3ヶ月の乳児から預かるが、生後2ヶ月のときもある。乳児が9人以上になると、看護婦が必要になってくるので定員は8名だが、現在は6名いる。

クラス分けは、ひまわり（年長）、すみれ（年中）、たんぽぽ（年少）、桃色チューリップ（3歳未満）、赤色チューリップ（1～2歳）となっており、ひまわり（年長）は、現在24人である。

最近の園児数は、1995年、1996年は、ほとんど変動はなく、100名前後で推移した。1997年4月1日現在102名でその年度内での変動102～107名だった。1998年4月1日現在は96名で8月1日現在は98名となった。これを見た限りでは、ここ数年はそんなに大きな変動は見られないようだ。この中で、地頭の子供の数は、1997年38名、1998年30名で全体的に、減っているようではあるが、データが数年分しかないのではなんとも言えない。

そして、保護者会の役員は、会長、副会長、書記、会計、連絡係、班長とあり、会長は年長児の親から1人、班長は集落別で、2班に1人と決められているが、具体的に誰かというところ知らないという人が多いという。

ここで、富来保育所で行われている行事についてみていきたい。まずは年に何回か行われている保育所開放であるが、これは、体験保育のようなもので、保育所に入る前の子供を持った母親に保育所に来てもらって、育児の悩みの相談などを受けている。

次は、ふれあい保育だが、これは、花植えなどを通じて老人会との交流や、はまなす園、アイリスなどの老人ホームへ慰問に行っている。このように、世代の離れた高齢者との交流も活発に行っており、核家族が増え、高齢者とのふれあいが少なくなった現代、高齢者と話をしたり、昔話を聞いたり、古くから伝わる伝統を受け継ぐ機会を持つということは、大変貴重なことだと思う。

富来保育所では、5月にひまわり（年長）だけ、バス遠足へ行く。昔は、金沢の石川動物園に行っていたが、今年は、富山ファミリーパークへ行ったということだ。

ちびっこまつりは、1998年は8月7日の夕方、保育園でひらかれ、ひまわり（年長）だけが、ダンボールで作ったおみこしをかつぐ。このちびっこまつりなどでは、地域の文化を体験させるため、盆おどりや八幡太鼓などもやっている。八幡太鼓保存会の人々が来たり、地域の人々を招いたりして、ふれあいも大切にしている。

次は、この富来保育所で働く保母について聞いてみたところ、多いときは、20人位いたが、

14～15人にまで減ったこともあったそうだ。でも乳児保育をするようになってから、保母の数は、少し増え現在は、保母16人、調理員3人になった。年齢は21～53歳までと幅広く、平均勤続年数は、18～20年ほどだそうだ。小松、名古屋、志賀町などから、婚入して来た人もいるが、現在は富来町に住んでいる人ばかりである。

V. 地頭町における「子供」

ここで、地頭町の家族構成と「子供」について考えることとする。まず20歳未満を、「子供」とみなし、地頭町の世帯において、1世帯で何人の「子供」がいるかを見してみる。ここでは主に商店街の中心を占める1～10班と、それ以外の新しい「団地」などを含んだ11～24班とに分けて比較してみた。比率(%)は、1～10班、11～24班、全体のそれぞれの総世帯数に対する割合である。

表－3 地頭町の1世帯の「子供」の数(20歳未満)

班 人 数	1 ～ 10 班		11 ～ 24 班		そ の 他	全 体	
	世 帯 数	比率(%)	世 帯 数	比率(%)	世 帯 数	世 帯 数	比率(%)
0 人	60	60.6	111	68.1	14	185	66.3
1 人	11	11.1	18	11.0	0	29	10.4
2 人	16	16.2	25	15.3	2	43	15.4
3 人	11	11.1	8	4.9	1	20	7.2
4 人	1	1.0	1	0.6	0	2	0.7
計	99	100	163	100	17	279	100

表－3を見ると「子供」が0人の世帯が多いのは一目瞭然であるが、1～10班と11～24班を比べて見ると、11～24班の方が、その割合が高くなっている。逆に、3人以上「子供」のいる世帯の割合は、1～10班の方が高くなっている。

これを1世帯あたりの「子供」の数の平均で見ても、1～10班は、0.80人、11～24班は0.59人、全体は0.67人となった。また、「子供」のいる家族だけを見ても、1班～10班は2.05人、11～24班は1.85人、全体は1.93人となった。

地頭町の世帯構成を1～10班の世帯と11～24班の世帯とで比べてみると、1～10班では3世代世帯の比率が、11～24班では2世代世帯の比率が高いのが、はっきりとわかる。これは、商店街の中心をなす、1～10班では、家にあとつぎが残るため3世代同居が多く、11～24班では、

表-4 地頭町の世帯構成

班 分類	1 ～ 10 班		11 ～ 24 班		そ の 他	全 体	
	世 帯 数	比率(%)	世 帯 数	比率(%)	世 帯 数	世 帯 数	比率(%)
単 身 者	16	16.2	26	16.0	7	49	17.6
夫婦のみ	19	19.2	33	20.2	4	56	20.1
2 世 代	16	16.2	71	43.6	5	92	33.0
3 世 代	39	39.4	31	19.0	0	70	25.1
4 世 代	6	6.1	0	0	0	6	2.2
不 明	1	1.0	1	0.6	0	2	0.7
兄 弟 姉 妹 の	2	2.0	1	0.6	1	4	1.4
合 計	99	100	163	100	17	279	100

サラリーマンなどの核家族が多いのではないかと推測される。

VI. お わ り に

この報告書を書いていて一番驚いたのは、やはり、Ⅱの最後で述べた保育園児数の急激な変化だ。1977年から1997年の20年間で3分の1近くに減少したという数字は、現実を直視させられた。「少子化」とは、現在よく聞く言葉だが、実際に感じることは難しい。しかし、この数字を見ると「少子化」が進んでいるのは、まぎれもない事実であることを認識させられる。昔は1組の夫婦に十数人の子供がいるということもあったが、医療や栄養面の問題で幼いうちに死んでしまうことが、よくあった。現在では、医療も進み、栄養面での問題もあまりないので、子供が1人や2人でも問題なく、また、1人の子供を育てるのに多額のお金がかかってしまう。そして、過疎化の進んでいるような地域では、学校を卒業しても就職口が少なく、子供を生むような世代の人は、就職口のある所へ出ていってしまう。それで、少子化は進んでしまうのだろう。それゆえ、教育の援助や就職などにおける、行政の取り組みへの期待は大きいものと思われる。